

## お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第 84 弾をお届けします。

(シリーズ担当：R. I.)

### お米のはなし 84 話 北海道の稲作り

長年、北海道のイネ育種研究に携わってきた岡部四郎が、「北海道における水稲品種改良—その歩みと担い手たち—」<sup>1</sup>をまとめているので、まずそれを紹介しましょう。

北海道における稲の栽培は、貞享 2 年（1685）、吉田吉右衛門が渡島地方文月村で試作したのが始まりとされています。その後 200 年近く失敗を重ねながら試作が繰り返され、安政 2 年（1855）庵原●齋（●；函の上に草冠）（いおはらかんさい）が「大野赤稲」など早生種を栽培するようになって道南地方の稲作はいくらか安定しました。この時期までに、津軽や秋田、あるいは北陸の地から持ち込まれたさまざまな品種が試作されました。

道中央地帯の稲作は、明治 6 年（1873）中山久蔵が石狩国島松川上流の開墾地に小面積の開田をしたのがはじまりです。その品種は、中山が道南の亀田郡から取り寄せた「赤毛」（あかけ）（一説には「津軽早生」とも）で、大野村の「赤稲」から農民が選び出したと言われています。



写真 84-1 「寒地稲作 この地に始まる」の記念石碑

明治 6 年（1873）に現在の北広島市島松の地で、中山久蔵が道中央の寒地で初めて安定した収穫を得たことから、北広島市は寒地稲作発祥の地と呼ばれており、その際に栽培された稲の品種「赤毛」を使って、さ

まざまな地域おこしの取組が行われています。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 岡部四郎（2004）北海道における水稲品種改良—その歩みと担い手たち—。西尾敏彦編 昭和農業技術史への証言 第三集 第 2 話 所収; 71-124

<sup>2</sup> 北海道農政事務所 HP [https://www.maff.go.jp/hokkaido/sapporo/kako\\_syokai.html](https://www.maff.go.jp/hokkaido/sapporo/kako_syokai.html) から抜粋引用（2023 年 10 月 30 日）。

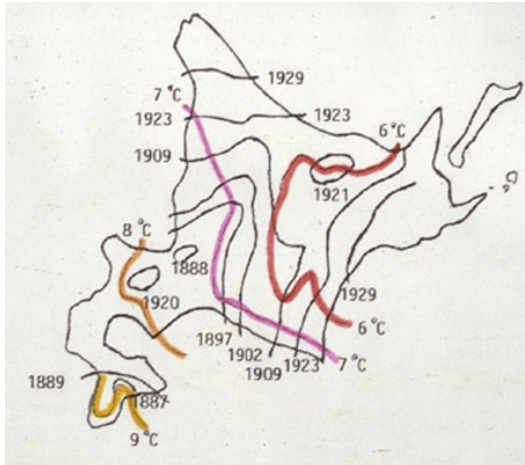


図 84-1 北海道稲作普及状況  
原図：川口文夫（1935）<sup>3</sup>から引用

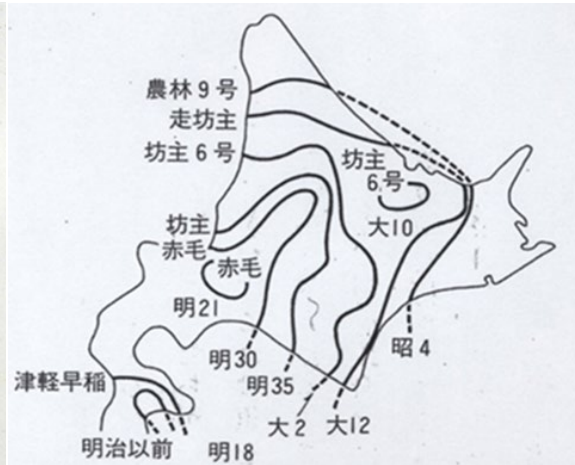


図 84-2 北海道におけるイネの栽培前線の北進  
改図：鳥山國士から引用

図 84-1 には等温線（年平均気温、9℃、8℃、7℃、6℃）を示し、図 84-2 には各年代の稲栽培限界とその代表品種を示している。「津軽早生」、「赤毛」、「坊主」、「坊主 6 号」、「<sup>はしり</sup>走坊主」、「農林 9 号」とあり、これらが栽培限界を拡大していったことがわかります。

これら品種について簡単に説明します。**赤毛**については前述したので、ここでは省略します。

**坊主**（ぼうず）は、明治 28 年（1895）に北海道札幌郡琴似村（現在札幌市）の江頭庄三郎らによって在来品種「赤毛」から選抜・育成されました。名のおり無芒で分蘖（ぶんげつ）は少ないが多収です。「赤毛」より早熟で、稈は長いが硬く、いもち病抵抗性も強い。やや大粒で脱粒しやすく、品質は劣ります。耐倒伏性も劣るなど「赤毛」と比べてそれほど評価はよくなかった。しかし、小作人の中田光治がこの種を譲り受け、美唄で栽培したところ好成績であったため、同地で広まりました。さらに中田の転居とともに砂川や士別へと広まったのです。

「坊主」は、1914 年（大正 3 年）に優良品種に指定された後、1916 年（大正 5 年）から北海道農試上川支場で分離育種された「坊主 1 号」「坊主 2 号」と、北海道農試本場で分離育種された「坊主 5 号」「**坊主 6 号**」が、1919 年（大正 8 年）に優良品種となりました。

石狩地方以北への稲作拡大に当たっては、「赤毛」「坊主」の外に数多くの早生種が農民によって選びだされ、上川地方を含む各地で試作されました。明治末から大正の初めにかけて選びだされた品種のうち、「魁」は当時の良質・最早熟種であり、「**走坊主**」の交配親になりました。この「走坊主」を親として、その後「**農林 9 号**」など多くの早熟種が生まれました。

「農林 9 号」は「早生チンコ」と「走坊主」の交配から生まれました。

当時の北海道では、労働力不足のため稲作の省力化として直播栽培が試みられ、上白石稲作試験場において直播栽培に成功しましたが、播種は容易でも除草や収穫に難があり、また点播では結局人手がかかることから、当初はあまり普及しませんでした。その後、1905 年

<sup>3</sup> 川口文夫（1935）『北海道米作の地理学的研究』地理学評論 11 巻 1 号；1-23

(明治 38 年) に末松保次郎らによって末松式直播器 (タコ足型直播器)<sup>4</sup>が、1908 年 (明治 38 年) には寺門らによって寺門式直播器が開発されると、「坊主」は爆発的に普及しました。これら直播器では、種籾に芒や枝梗があるとスムーズな播種ができなかったのですが、「坊主」は当時の品種としては珍しく芒がなかったため直播器と相性が良かったのです。1932 年 (昭和 7 年) の作付面積は、道央地区を中心に 13 万 6726ha に及びました。

「坊主」の発見は、直播器の発明とともに、明治後半から大正半ばにかけての空知地方や上川地方での稲作拡大の原動力となりました。特に、北海道で最大 16 万 ha に達した稲の直播栽培は、「坊主」なしでは考えられなかったと評価されています。

「坊主」は、北海道農事試験場が 1915 年 (大正 4 年) に本格的な交配育種を始めると、最初の交配親の一つに選ばれ、1924 年 (大正 13 年) に北海道の交配育種で初めて優良品種となった「走坊主」の親品種でした (「魁」との交配による)。これは、「坊主」を早生化した「坊主 6 号」よりさらに 1 週間熟期が早く、種子親の早熟種「魁」よりもさらに 4~5 日早熟という極早生品種で、北見地方、上川地方北部、天北地方への稲作北進に寄与したのです。

---

発行:(公社)国際農林業協働協会(JAICAF)  
〒107-0052 東京都港区赤坂 8 丁目 10-39 赤坂 KSA ビル 3 階

---

<sup>4</sup> 北海道博物館所有 水稲直播器 [https://jmapps.ne.jp/hmcollection1/det.html?data\\_id=216](https://jmapps.ne.jp/hmcollection1/det.html?data_id=216) (2024 年 5 月 31 日閲覧)